

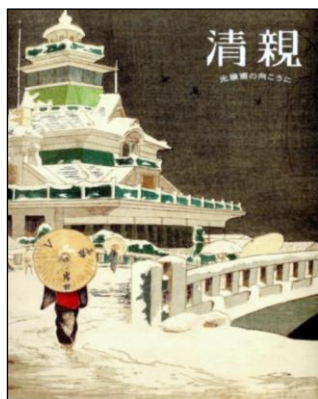


町田市立国際版画美術館 展覧会図録

【 2016年 ~ 2007年 】

- ・お申し込みは希望図録名を明記のうえ、現金書留で当館まで代金をお送りください。
その際、図録代は現金、送料は切手をお願いいたします。現金書留の料金はおお客様でご負担下さい。
- ・2冊以上お申し込みの場合の送料についてはお問い合わせ下さい。

清親—光線画の向こうに 展覧会 2016/3/12~4/17



ガス灯が並ぶ文明開化の街並みから日清・日露戦争まで、“明治”を描いた浮世絵師、小林清親（1847~1915）。2015年には、没後100年を迎え、改めて注目が集まっています。

清親は弘化4年（1847）、江戸本所御蔵屋敷に下級役人の子として生まれました。幕府崩壊後は、幼い頃より好きだった錦絵に生活の道を見出し、明治9年（1877）、新しい東京の風景を叙情的に描き出した『東京名所図』シリーズを刊行します。季節や天候の繊細な移ろいを、光と影の巧みな表現で写したこの風景画は「光線画」と呼ばれ、浮世絵界に新たな風を吹き込みました。

明治14年（1881）以降は、自由民権運動の気運高まるなか、雑誌や新聞を舞台に数々の風刺画を描きます。また明治27年（1894）に日清戦争が勃発すると、光線画で培った光と影の表現を活かした戦争錦絵を発表します。石版や銅版といった木版以外の版画技法にも取り組み、晩年には肉筆画も描きました。江戸期には定番だった役者や美人を主な題材とせず、社会の動きや新しいメディアと向き合い続けた清親は、浮世絵史の最後に煌いた、まさに“明治の浮世絵師”といえます。

この展覧会は、上記の作品に加えて、井上安治や小倉柳村から織田一磨に川瀬巴水まで、清親に共感を示した絵師の作品を交えながら、約330作品で清親像を多角的に辿ります。

図録目次

小林清親—その画業・人と時代—岩切信一郎 / 図版 / 光線画の向こうに—清親像をめぐる 村瀬可奈 / 作品解説
/ 現代の地図でみる光線画 / 小林清親年譜 / 主要参考文献 / 作品目録 / Section Descriptions and List of Works

図録体裁

■発行日：2016/3/12 ■頁数：278ページ(カラー171ページ) ■サイズ：280mm×225mm ■重量：1050g

図録価格 2,300円 送料 560円(切手でお預いたします)

パブロ・ピカソ—版画の線とフォルム— 展覧会 2014/4/12~6/15



パブロ・ピカソ（1881~1973）は20世紀を代表する美術家です。その創造領域は、絵画や彫刻のみならず、陶器や舞台装置、衣装などにいたるまで幅広く、超人的ともいうべき膨大な作品を残しています。版画でも早くからその才能をあらわし、多様な技法で豊かな創造力を発揮しました。

ピカソは人生のさまざまな場面で、つねに版画と向き合いました。パリに出てまもない1904年から本格的に銅版画を制作し、画商ヴォーラルに認められてエッチングやドライポイント、ビュラン、アクアチントなどに挑戦します。第二次世界大戦後は刷り師ムルロとの出会いを経て、数多くのリトグラフの傑作を生み出します。最晩年を過ごした南フランスでは、リノカットの制作方法を独自に編み出して、多彩で豊穡な芸術世界を構築しました。制作した版画の数は確認されているだけでも2,000点を超えており、彼の芸術を語るうえで重要な位置をしめています。

本展では、生涯を通じて描き続けたピカソの繊細でリズムカルな線と湧き上がるフォルムに注目して、版画の魅力と表現の秘密に迫ります。

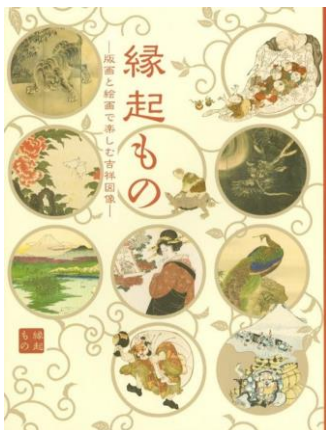
図録目次

版画を通して見るピカソとスペインの関係 松田健児 / 図版 / ピカソの版画と刷り師たち 高木幸枝 / パブロ・ピカソ略年譜
/ 技法解説 / ピカソの足跡 / 参考文献 / 出品リスト

図録体裁

■発行年：2014 ■頁数：176ページ(カラー136ページ) ■サイズ：260mm×185mm ■重量：660g

図録価格 2,300円 送料 350円(切手でお預いたします)



日本では古来、松竹梅や鶴亀に代表される縁起のよい動植物、福をもたらす七福神、長生きの象徴である仙人などの吉祥画題が好まれ、描き継がれてきました。

江戸時代に入ると、こうした画題は文学作品や中国絵画の影響を受けて、いっそうバリエーション豊かに展開します。形態も多様化し、版本や浮世絵、新年の暦である歳旦摺物としても制作されるようになりました。その背景には、健康、長寿、繁栄、成功を願う人々の、今も昔も変わらないありのままの姿を見ることができます。

この展覧会では、歌川広重らの浮世絵、窪俊満らの摺物、版本、さらに池大雅、伊藤若冲、円山応挙らの掛軸や屏風などを加えた総計約200点の作品によって、江戸時代絵画史の大きな柱のひとつとも言える吉祥画の展開を総合的にご紹介します。

図録目次

「縁起もの」の由来と意味—中国から日本へ—佐々木守俊 / 図版 /
月儼『列仙図贊』をめぐる—窪俊満「列仙」摺物を中心に—松岡まり江 /
作品解説 / 作品目録 / 英文目録

図録体裁

■発行日：2013/9/28 ■頁数：192ページ(カラー102ページ) ■サイズ：295mm×225mm ■重量：940g
図録価格 2,000円 送料 560円(切手でお願ひします)



明治30年代後半、当時盛んに発行されていた印刷物や複製的な性質の版画を批判して、「創作版画」とよばれる作品を制作する美術家が登場しました。それは、画家自身が直接木版を彫ったり石版に絵を描いたりすることを原則とし、オリジナルであることを重視した版画でした。それ以後創作版画は、木版画を中心に新しい表現形式として美術界に迎えられ、多くの制作者を生み出すこととなります。

また、創作版画を制作する作家たちは、洋画家や彫刻家と同様に、大正から昭和期に隆盛したさまざまな美術思潮を吸収し、時代が要請するテーマを率直に、個性的に表現していきました。たとえば個性を追い求めた大正時代には、恩地孝四郎や田中恭吉らが『月映』を発行し、青年期特有の複雑な心情を木版画に赤裸々に刻み込んでいます。関東大震災からの復興を遂げた昭和初期には、谷中安規がモダン都市東京の相貌を不安感と共に個性的に描き出しました。

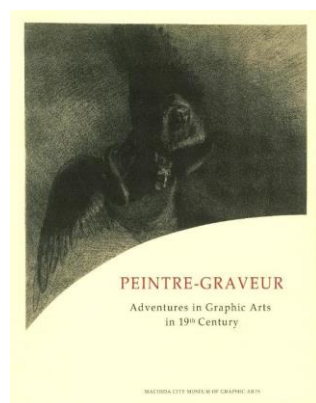
本展覧会は、版画家で版画史研究者でもあった小野忠重が集めた貴重なコレクションと、町田市立国際版画美術館が25年間にわたって収集してきた版画を合わせた作品群のなかから、優れた創作版画を厳選し、34作家、約230点によってその魅力を紹介するものです。

図録目次

「版画家群像 大正・昭和のベスト・セレクション」展について 滝沢恭司 / 図版 / 作品目録

図録体裁

■発行日：2012/6/23 ■頁数：40ページ(カラー20ページ) ■サイズ：240mm×190mm ■重量：128g
図録価格 800円 送料 215円(切手でお願ひします)



社会構造が大きく変化した19世紀後半のヨーロッパ。写真の登場や印刷技術の飛躍的な発展などのために版画は大きな岐路にたたえられました。時代遅れの技術として消えていくのか、美術表現のひとつとして自立するのか、版画の生き残りをかけたさまざまな挑戦が開始されます。そこで大きな役割を果たしたのが、自由な発想で版画を制作したミレーやピサロ、ドガやルドンなどの画家たちでした。そして、彼ら「画家にして版画家」(peintre-graveur)の仕事によって、版画は美術表現としての道が切り開かれ、新しい時代に適応していくこととなります。

本展覧会は、版画が生まれ変わるこの過程を3部構成によって紹介します。出品作品は国内とフランスの機関が所蔵する優れた版画と、関連する油彩や水彩等をあわせた約200点です。画家たちの個性的な試みを追いつながら、彼らが版画のどこに存在理由を見出していったのかを考え、同時に版画の魅力を再発見していただければと思います。

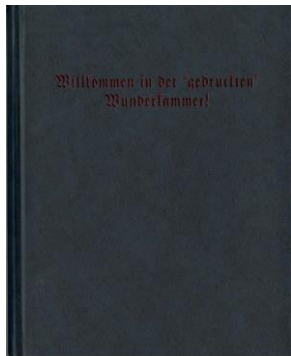
図録目次

オリジナルはどこへ—セゴレーヌ・ル・メン / 版画の冒険—和南城愛理 / 図版 /
技法解説 / 主要参考文献

図録体裁

■発行日：2012/4/14 ■頁数：184ページ(カラー128ページ) ■サイズ：275mm×215mm ■重量：700g
図録価格 2,700円 送料 350円(切手でお願ひします)

版画でつくる 驚異の部屋へようこそ！ 展覧会 2011/10/8～11/23



「驚異の部屋」とは、珍しいもの、不思議なもの、得体の知れないもの・・・それらを集めて一堂に並べてみたいと思う人間の飽くなき好奇心を満たすべく作られた部屋です。ドイツ語で言えば“ヴンダーカマー”と呼ばれるこの部屋は15世紀後半以後、アメリカ大陸がヨーロッパの人々の知るところとなった頃に生まれました。王侯貴族は富に飽かして“新大陸”からもたらされる珍しい貝や動物の剥製、鉱物や植物から宝石や美術工芸品まで、ありとあらゆるものを競うように集め、自分専用の「驚異の部屋」を作っていました。それは博物館や美術館の始まりとも言えるものでした。

本展では15-18世紀にヨーロッパで流行したこの「驚異の部屋」の精神にない、解剖図や動物図譜などの自然の驚異、怪異な空想の世界を描いたものなど、あっと驚く変り種の版画を結集させ、版画によって「驚異の部屋」の雰囲気構築します。そこでは、精緻な版画技法、美しい多色刷りなどの高度な技法の素晴らしさ、そして描かれた事物やテーマの珍奇さという3つの驚きが楽しめるでしょう。さらに人間の多種多様な表現意欲の歴史でもある版画の歴史、その世界の広さや奥深さを知ることできるでしょう。

美しいものを鑑賞するという美術館で過ごす時間は、人々の心に「うるおい」や「ゆとり」を生み出します。しかし、この展覧会はそれだけではありません。見る人の好奇心を刺激し、脳を活性化する、まさに「脳に効く」展覧会なのです。

図録目次

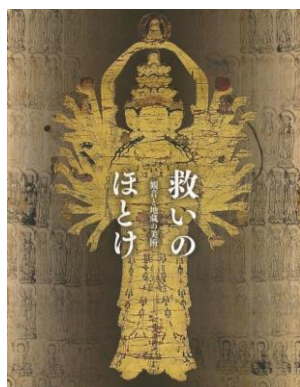
驚異の部屋★驚異の旅 巖谷國士 / アタナシウス・キルヒャーの劇場世界 竺覚暁 / 図版 / 作品目録 / 主要参考文献

図録体裁

■発行日：2011/10/8 ■頁数：238ページ(カラー31ページ) ■サイズ：220mm×175mm ■重量：600g

図録価格 2,600円 送料 450円(切手でお願います)

救いのほとけ—観音と地蔵の美術— 展覧会 2010/10/9～11/23



仏教の多様なほとけのうち、苦しみにあえぐ人々に進んで救いの手をさしのべる存在として注目されたのが、観音菩薩と地蔵菩薩です。観音はさまざまな災いを除く菩薩として、地蔵は地獄に落ちる苦しみから人々を救う菩薩として、広く信仰されてきました。「観音さま」「お地蔵さま」という呼び名が示すように、これらの菩薩は現代の私たちにとって、もっとも親しみ深いほとけといえるでしょう。その姿はさかんに仏像、仏画、そして版画にあらわされてきたのです。

この展覧会は、観音と地蔵の姿をあらわした版画、それらの版画を内部の空間に納めた仏像、関連の深い仏画や絵巻物など、「救い」をテーマとする仏教美術の醍醐味を味わっていただくものです。同時に、時代や宗教を越えて営々と伝わる、生と死をめぐる人々の思いを考える機会といたしたく企画しました。

図録目次

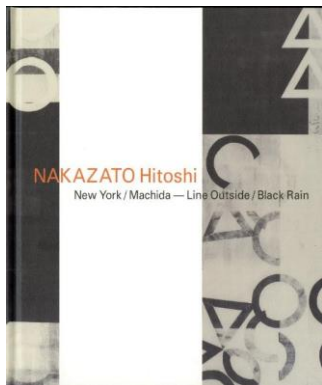
救いのほとけ—おもに印仏・摺仏の像内納入について 佐々木守俊 / 広利寺十一面
観音立像と律宗 大河内智之 / 「中御門逆修」地蔵菩薩像の像内納入印物 藤原重雄
/ 図版 / 作品解説 / 落款・印章・賛文 / 年表 / 目録

図録体裁

■発行日：2010/10/9 ■頁数：200ページ(カラー120ページ) ■サイズ：295mm×225mm ■重量：1400g

図録価格 2,500円 送料 560円(切手でお願います)

中里斉 モダニズム・ニューヨーク⇔原風景・町田 展覧会 2010/6/19～8/8



芹が谷に帰る(中里斉「線外から、単子論、そして黒雨」抜粋)

町田市立国際版画美術館の所在地、芹が谷は急坂の森に挟まれた田圃だった。森と田圃の境の両側には小川が流れ、其処彼処に湧き水が出て、我々子供たちの乾いた喉を潤してくれた。近くにあって町田唯一の幼稚園から、芹が谷の向こう側の丘の上にあった芝公園に遊びに行った。父は忠生村(現町田市)境川出身の国鉄職員、当時写真が趣味だったが、その時に撮った記念写真が今でも残っている。芹が谷は戦中・戦後の食糧難の時には、田螺、沢蟹を捕ったタンパク質の供給源だった。たしか昭和30年代中頃まで、野兔を追って駆け回った。

1990年のある日、1971年以来教えていたペンシルヴァニア大学の僕のメールボックスに、分厚い1冊の展覧会カタログが入っていた。その裏扉にRuth Fineとペン書き署名があった。ペン大美術大学院は母校であり、Ruthは僕より2学年上、当時、ワシントンDCのナショナル・ギャラリーの現代版画と素描課の学芸員であった。このカタログは、彼女がキュレーションし、町田市立国際版画美術館で開催された「ジェミナイ工房、芸術家とアルティザンの協力」展のカタログであり、彼女が帰国後、僕のメールボックスに置いていってくれたのだ。ここに初めて自分のふたつの故郷、町田とペン大が結びついたのだ。そして、この自分が育った地に建っている美術館で作品を発表したいという気持ちが募り、今回多くの人々の協力を得てこの個展が可能になった。

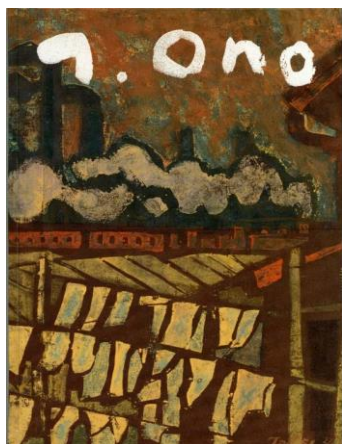
図録目次

線外から、単子論、そして黒雨 中里斉 / 中里斉の生活と芸術 針生一郎 / 中里斉の麗しきポジション 建昌哲 / ヒトシと知り合っ マット・フリードマン / イメージの復権と増幅—中里斉展のための覚書 滝沢恭司 / 卒業生のニューヨーク・スタジオを訪ねて 佐藤東洋士 / 図版 / 略年譜 / 主要参考文献 / 出品作品リスト

図録体裁

■発行日：2010/6/19 ■頁数：128ページ(カラー64ページ) ■サイズ：250mm×210mm ■重量：600g

図録価格 2,000円 送料 350円(切手でお願います)



小野忠重（1909-1990）は日本を代表する版画家であり、版画史研究者としてもよく知られています。2009年はその小野忠重の生誕100年にあたります。この記念すべき年に、町田市立国際版画美術館では、小野の作品を中心に、彼と交流した版画家たちの作品や小野の著書などを展示する「生誕100年 小野忠重展-昭和の自画像-」を開催します。

昭和初期、二十歳のときに小野忠重は、プロレタリア美術大展覧会に油彩画や版画を出品し、左翼美術への関心を表しました。やがて版画表現の可能性に気づいて「新版画集団」を結成し、工場街や市民生活を木版画に刻んで、版画家としての活動を本格的に開始しました。つづいて作品内容の充実を「版画の絵画的確立」ということばで表現して「造型版画協会」を結成し、油彩画を意識した大画面の木版画に、戦時下の不穏な気配を表現しています。

戦後になって小野は、独自の陰刻法による多色刷り木版を考案し、重厚な色彩と彫刻刀の鋭い線によって、モノタイプに近い独自の版画表現を築きました。小野はそれらを「版の絵」と呼んでいます。そうした手法で描き出されたヨーロッパや日本の風景版画には、東京下町に生まれ育った小野ならではの庶民感覚や、歴史好きのロマンチズムなどが現れています。この一方で小野は、戦前から持ち続けていた社会批判の精神を、ヒロシマや水俣を主題とする作品に表現しています。昭和をまるごと生きた小野の眼から生まれたこのような作品は、まさしく普遍的な意味での「昭和の自画像」といえるでしょう。

さて、小野は1941年に『日本の銅版画と石版画』を上梓するとともに、双林社という小出版社を立ち上げました。その後、出版事業整備で廃業を迫られる1944年までに13冊の本を世に送りだしています。

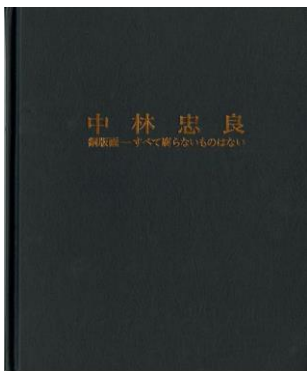
また小野は、戦前より版画史研究に着手し、戦後になってさらに本格的に取り組んでいます。その結果、資料的価値の高い『日本の石版画』や『本的美術史-奈良絵本から草双紙まで』などが上梓されました。本展覧会ではそうした小野の編集・出版人、そして研究者としての側面も積極的に検証・紹介いたします。

図録目次

版の人生 池内紀 / 「小野版画ノ守忠重」と尊称された人 村田哲朗 / 図版 / 実像をさがして-再考、小野忠重とプロレタリア美術運動 滝沢恭司 / 造型版画協会の航跡 / 小野忠重年譜 / 主要著作目録 / 出品目録

図録体裁

■発行日：2009/10/3 ■頁数：134ページ(カラー44ページ) ■サイズ：300mm×230mm ■重量：800g
 図録価格 2,400円 送料 560円 (切手でお願ひします)



本江邦夫「存在の奥底から-中林忠良に関する覚書」抜粋

中林忠良がさらに非凡だったのは、原版を求めて銅板を腐蝕させるのではなく、腐蝕そのものに目を向けたことであろう。1983年、彼はある完成作の原版を腐蝕液に浸け、2時間おきに取り出して刷り取る試みを行っている。18枚の刷りができたが、驚いたことに、当初の形象を失っていくそのどれにも特有の美しさがあった。これはつまり、「作品が完成する時点はいくつもあるということ」であり、さらに言えば「銅版も自分も、植物や地もそれぞれが大きな腐蝕の過程にあるそのただ中で、在るということを感じた一瞬においてだけ繋がり、それを形象化したものが作品だったのだという、当たり前のことの確認だった」（『中林忠良-腐蝕のまなざし-展』カタログ、東京藝術大学大学美術館陳列館、2005年）

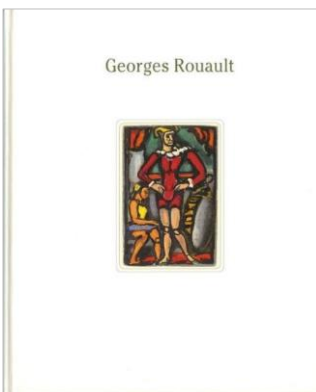
人も物も、すべてのものはその腐蝕のただ中で自らの存在を自覚する瞬間がある。そこに一瞬の閃きのような一致があれば、ただちに作品は出来る。中林がこの直観を得たのは、1年間の在外研修から帰ってきた翌年、1977年頃のことだ。

図録目次

存在の奥底から-中林忠良に関する覚書 本江邦夫 / 腐蝕の原風景-中林忠良の銅版画 佐川美智子 / 図版 / 版画集 / 年譜 / 主要展覧会歴 / 主要参考文献

図録体裁

■発行日：2009/6/27 ■頁数：162ページ ■サイズ：250mm×205mm ■重量：700g
 図録価格 2,500円 送料 350円 (切手でお願ひします)



20世紀最大の宗教画家と評されるジョルジュ・ルオー（1871-1958）。敬虔なカトリック信者であった彼の作品は信仰に基づく独自の主題に貫かれ、人間の罪を見つめる鋭いまなざしと弱き物への憐れみの心、そして深い宗教観に基づく人間愛に満ち溢れています。

ルオーの油彩画はその重厚な質感（マチエール）でよく知られていますが、それは版画においても同様です。戦争の罪深さをテーマにした『ミセレーレ』では、工夫を重ねた銅版画の技法により、重厚なマチエールを生み出すことに成功しました。色彩表現では、専門の刷り師とともに銅版画による多色刷りを研究し、『流れ星のサーカス』や『受難』などに見られる、驚くほど深みのある色彩へと辿りつきました。質感と色彩を深く追究することで、ルオーは油彩画のみならず版画においても際立った個性を見せているのです。

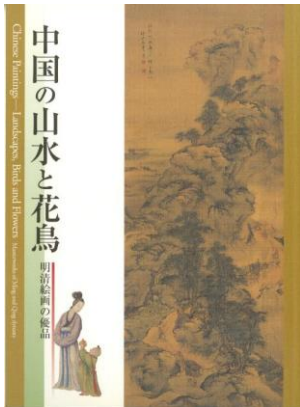
深い信仰に基づく人間存在へのまなざしと内省、それを表現する技術を追求する姿勢、その両輪がルオーの芸術を支えています。この展覧会では、代表的な版画作品110点と、版画に深い関わりのある1940年代までの油彩画約20点、合わせて130点を展示し、絵画と版画が一体となって繰り広げられたルオー芸術の本質に迫ります。

図録目次

ジョルジュ・ルオーと日本人との出会い 村田哲朗 / 透視者ルオー 田中淳一 / 繰り返されるテーマルオーの描いた「王」をめぐる 杉野秀樹 / 版画と絵画のはざまに-ルオーとヴォーラーレの関係を中心に 高木幸枝 / 図版 / 版画技法解説 / 年譜 / 主要参考文献 / 出品作品リスト

図録体裁

■発行日：2009/4/11 ■頁数：117ページ(カラー45ページ) ■サイズ：250mm×205mm ■重量：600g
 図録価格 2,100円 送料 350円 (切手でお願ひします)



中国は20世紀を迎えるまで、しばしば王朝が交替しながらも東アジア絵画界の中心に位置を占め、常に周辺諸国をリードしてきました。中国絵画を鑑賞する伝統は、日本でも長年にわたって培われてきました。国内に現存する膨大な作品は、中国絵画が大切にされてきた歴史のあらわれです。その割りに、現代の私たちが中国絵画に触れる機会は必ずしも多くはありません。しかし、その魅力を知る人々は懸命に作品を収集し続けました。こうして、幾つもの特色あるコレクションが形成されました。

町田市立国際版画美術館では上智大学教授小林宏光氏のご指導を仰ぎ、町田市にゆかりの深い1人の個人収集家が情熱をそそいで築き上げた中国絵画コレクションの調査を進めてまいりました。その結果、明・清時代（1368-1911）の優品を多く見出すことができました。本書に掲載される作品はすべて、このコレクションの中から厳選されたものです。

明・清時代には正統派から個性派までさまざまな画家たちが腕を競い、まさに百花繚乱といえる世界をくりひろげました。室町時代から江戸時代にかけての日本美術に与えた影響力という観点からも明清絵画の重要性は見逃せず、本書がその普及・研究の一助となることを願ってやみません。

図録目次

明清絵画の500年-文人画から洋風画まで-小林宏光 / 図版 / 作者略伝 / 作品目録

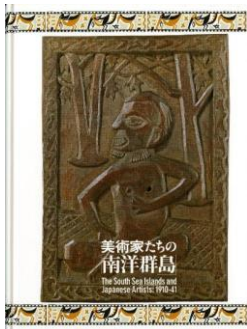
図録体裁

■発行日：2008/6/28 ■頁数：72ページ(カラー32ページ) ■サイズ：255mm×190mm ■重量：250g

図録価格 1,800円 送料 300円(切手でお願います)

美術家たちの南洋群島

展覧会 2008/4/12～6/22



赤道付近の太平洋上に浮かぶ南の島々が、「南洋群島」と呼ばれた時代がありました。大正から昭和初期にかけて、多くの画家や彫刻家はその島々に渡り、固有の風土や文化に着想を得た作品を制作しています。しかしそれらが、ひとつの文脈をもって日本近代美術史のなかで顧みられる機会は永らくありませんでした。

「南洋群島」とは、南進論の掛け声のもとに日本が進出し、第一次世界大戦の勃発と同時に占領、国際連盟の承認を得て委任統治下におかれていた地域です。第二次世界大戦では激戦地となったことで知られています。本展は、その「南洋群島」を舞台に、偶然の出会いから師弟関係が結ばれた土方久功、杉浦佐助、儀間比呂志の作品を中軸に構成されています。長きにわたって島々に暮らし、人々と深く交わりながらそれぞれの探求を重ねた土方と杉浦に、沖縄から現地に赴き、杉浦に弟子入りした美術を志した儀間を加えた三人を、真に「南」に生きた典型的人物として捉え、その作品を紹介いたします。

さらに本展では、彼らと同時代に「南洋群島」に渡った美術家たちの動向を可能な限り調査し、現存する主要な作品を展示しています。関連する資料や書籍と合わせてそれらを一堂に紹介することで、通底する時代精神とともに、表現の特質や、「南」への志向と日本の美術や文化の形成との関わりをも明らかにすることを企図しています。

図録目次

「南洋群島」三代の系譜-土方久功、杉浦佐助、儀間比呂志 岡谷公二 / 美術家たちの「南洋群島」雑感-いくらか書誌風に青木茂 / 美術家と「南洋群島」と日本近代美術と 滝沢恭司 / 図版 / 「南洋群島」を書く-本と装幀・挿絵 / 「南」から「南」へ-「南洋群島」と芸術家・儀間比呂志 豊見山愛 / 「南洋群島」以前の南洋群島-ドイツ帝国領時代の二人の画家の南洋行 奥野克仁 / 作家解説 / 「南洋群島」美術年表 / 昭和初期の「南洋群島」地図 / 主な公刊美術文献一覧-戦前を中心に / 出品作品リスト

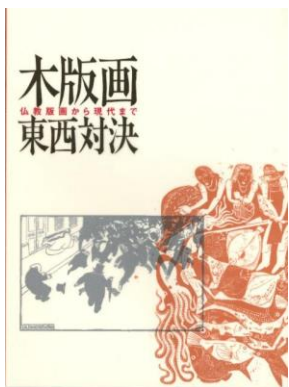
図録体裁

■発行日：2008/4/12 ■頁数：182ページ(カラー108ページ) ■サイズ：265mm×195mm ■重量：700g

図録価格 2,100円 送料 350円(切手でお願います)

木版画東西対決 仏教版画から現代まで

展覧会 2007/10/6～11/25



木版画は版画のなかで最も長い歴史をもち、東洋でも西洋でも作り続けられてきた技法です。木の板を彫って版を作り、絵具をつけて刷る、そのしくみは単純です。けれどもさまざまな国、さまざまな時代に、木版画は千変万化の表現を生み出してきました。この展覧会では、木版画の多様性を「日本と西洋」という視点でくらべ、表現の違いと互いに与えた影響を考えます。

展覧会は5部で構成されます。

プロローグでは、近代以前の日本と西洋それぞれの木版画の展開を追います。別々に発展してきた両者は近代になって直接に出会い、互いに影響を与え合いながら新しい表現を生み出していきます。そして、いよいよ全4ラウンドの対決の幕が切って落とされます。

第1ラウンド「モノクロ対決」は単色の木版画作品での勝負です。鑿の彫り跡を荒々しく残した作品、白黒の分量の配分を緻密に考え構成した作品など、白と黒の多様な表現をお楽しみ下さい。第2ラウンドは「多色刷り対決」。浮世絵の伝統ゆえに日本の優勢が予想されますが、試行錯誤の末に力強い表現に至った西洋の木版画が近代美術に与えた影響も見落とすことができません。第3ラウンドは「木口木版対決」。18世紀末に西洋で誕生したこの技法は、東西で独自の花を咲かせています。そして最終第4ラウンド「現代木版対決」。美術表現が複雑に変わっていくなかで、木版画も大きく変貌します。新しい技法や表現が登場し、まさに百花繚乱。そこにグローバルな拡がりを感じるか、東西各洋の伝統を見るか、あなた自身の目で判定を下してください。

図録目次

「木版画東西対決展について」 和南城愛理 / 図版 / 作家解説 / 作品リスト

図録体裁

■発行日：2007/10/6 ■頁数：96ページ(カラー64ページ) ■サイズ：260mm×190mm ■重量：360g

図録価格 850円 送料 300円(切手でお願います)